

ロバート・ヘリヤー、ハロルド・フス編  
『明治維新——グローバルな国としての日本』

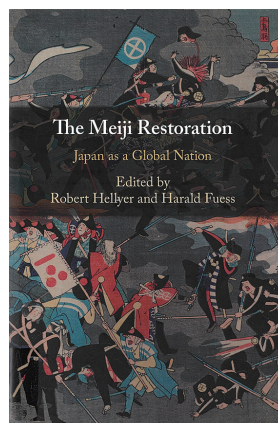
Robert Hellyer and Harald Fuess, eds.

*The Meiji Restoration: Japan as a Global Nation*

本書は、明治維新前後の日本をグローバル・ヒストリーの観点から検討した論文集である。グローバル・ヒストリーを適用した維新研究は、今世紀に入り増えている。グローバル・ヒストリーの中には、一国的な歴史叙述に批判的な結果、国民国家にとつて周縁的であったテーマをことさらに取り上げる研究もあるが、本書はグローバル・ヒストリーから得た知見が日本の国民国家形成にとつてどういう意味を持ったかを再考することへの関心が強い。

それだけに、国単位の外交史や比較史に近い章もある。単著であれば、グローバル・ヒストリーとの兼ね合いに頭を悩ませなければならぬかもしれないが、論文集であるため、各著者の個性に応じて多様な可能性を尋ねている。良いことではないだろうか。

五百旗頭薫



Cambridge University Press, 2020

最初の二つの章は特に面白い。

マーク・メツラー（第一章）は、開国した日本が輸出に成功した理由を広い視野で説明する。一八五〇年代、英国はアロー号事件を契機に、清朝に揚子江沿岸を開港させる。さらにインド大反乱を鎮圧して本格的な植民地化を断行し、鉄道敷設を加速させた。こうして中印の内地が世界市場に結合され、アジア貿易が拡大する中で日本は開国できた。加えて米国では一八六一年に南北戦争が勃発し、北軍による海上封鎖によって南部からの綿花輸出が滞り、日本の綿花が歓迎された。

逆に南北戦争の終焉は世界的な生産過剰と恐慌を招いた。バブルに懲りた英国は、中央銀行制度を創設する。日本が深刻な打撃を受けたのは当然である。経済の混乱により幕府の統治能力は致

命傷をこうむり、維新をまたいで一八八〇年代まで輸入超過の基調が続く。開港時の日本の貿易をグローバルな視点で描いた、優れたパノラマである。

日本の鎖国の発端は、貿易の制限以上に、日本人の海外渡航の禁止であった。これの打破に寄与したのが、米国の捕鯨業であったとエル・ウィルソン（第二章）は指摘する。

一八四〇年代には、北太平洋が世界に残された最も有望な捕鯨場となっていた。マシュー・ペリー率いる黒船艦隊が日本に來航した際、捕鯨船への補給を強く求めた。函館と下田を開かせたのも、捕鯨船にとって便宜な位置にあつたためである。タウンゼント・ハリスは修好通商条約の協定関税を起草する際、捕鯨船への補給を制約しないよう配慮していた。

日本は物資だけでなく、乗組員の補給地として期待されていた。函館の奉行も協力的だった。外洋航海の技術を習得できるからである。一八六六年に日本と列国が締結した改税約書は、海外の外国人に雇われた日本人の海外渡航を認めた。水夫の獲得・提供が目的だった。日本の旅券制度の成立も、水夫の海外渡航を重要な動機としていた。知り尽くしていたつもりの外交史上の定番演目に、捕鯨業の観点からの再考が逐一書き込まれており、小気味よい。

もちろん国際環境が直ちに日本の経済を規定したわけではなく、

国内要因も重要である。サイモン・パートナー（第三章）は、甲州から横浜に出て投機的に木炭や蚕卵紙を外国商人に売り込んだ篠原忠右衛門の人生を辿っているが、忠右衛門が小規模な資本で参戦できたのは、甲州で商品作物栽培と為替金融が成熟していたからである。また、内と外の間にある一種の時空のひずみを描いている。ヨーロッパでフランスが普仏戦争に惨敗したことはたちまち蚕卵紙の需要を激減させ、忠右衛門を没落させた。他方で江戸・横浜と甲州の間の情報伝達には時間がかかり、忠右衛門はそれを利用して利ざやを稼いでいたのであった。

本書は、海外からの軍事的なインパクトについても、そのまま日本を激変させたという叙述を避け、国内要因が介在した間接的な因果を重視する。

マーレン・エーラス（第五章）は、水戸で蜂起した天狗党が、越前の大野盆地に侵入した事件を取り上げる。兵力に不安のある大野・松平家が焦土作戦を取ったことは、村々に大きな被害と憤慨をもたらした。天狗党を突き動かしたのは攘夷論であり、そこに国際的背景を読み込むことはできる。だがこの時代の日本人が体験した戦争のほとんどは対外戦争ではなく内戦であり、天狗党はその先駆けだった。内戦だからこそ、遭遇した大名には討伐、抵抗、沈黙、協力と多様な選択肢があり、選択を誤ることで權威の低下を招き得たといえよう。

大野では農兵も動員された。それが、異国船の脅威が薄い地域・時期を含めた幅広い現象であったことをブライアン・プラット（第六章）が説明している。佐久（長野県）の例を見るに、それは動乱期の社会秩序を懸念した村の有力者がイニシアティブを取ったものであった。彼らは、農兵のための資金供出を契機とした学校の設立と道徳の再興まで構想していた。プラットの論文を読むと、明治期の国家形成の地方的基盤をかいまみた心地になる。軍事的な対外関係を、本書が重視する貿易の文脈に戻して論ずることもできる。本書はライフルを中心とした兵器輸入の問題に第二章を割いている。

英国（スコットランド）出身のグラバーが薩摩を仲介に長州に売ったエピソードがあまりにも有名だが、ハラルド・フス（第四章）は独仏の商人にも目を向けるようながす。その方が、薩長と幕府・北部同盟（奥羽越列藩同盟）の熾烈な買い付け競争が浮かび上がる。この競争で幕府が健闘していたからこそ、薩長は性急な王政復古に訴えたのではないかと示唆する。

戊辰戦争研究で定評のある保谷徹も、英語圏の読者に一章を提供している（第七章）。新式のライフルは戦術を一変させる。幕府も有力大名もライフルの輸入に努め、かつそれにとまなう戦術や軍制の改革に努めた。したがって戊辰戦争の帰趨を決めた重要な要因は、改革しやすいシステムであったか否かである。巨大な

システムであるが故に幕府が苦心したのに対し、薩長は王政復古の名の下に他大名の軍にまで介入できたようである。

戊辰戦争後の国内和解も、グローバルな貿易状況の影響を受けていた。ロバート・ヘリヤー（第八章）は、見廻組の一員として坂本龍馬を殺害した今井信郎の生涯を取り上げる。今井は幕府側に立つて最後まで戦った。戊辰戦争の死者は比較的少なかったとはいえ、敗者が簡単に諦められる戦いではなかった。だが静岡に移住した後、日本茶の需要が米国を中心に高まる中で茶農家として活躍する。貿易の拡大は致富の道を拓くとともに、和解の余地も広げた面があるらしい。

北海道の屯田兵も国内和解の手段としてとらえるべきだとステイブン・アイビンス（第九章）は主張する。ロシアへの備えとしては不十分であり、士族授産としても規模が小さすぎ、長続きした者も少なかった。少数への手厚い優遇で戊辰戦争の敗者を懐柔したと解するのが、もつとも合理的であるという。

敗者との和解に劣らず、過去との和解が明治日本には必要であったかもしれない。近代国民国家の形成は、過去からの決別である。だが同時に、他国と異なる伝統を発見ないし創造することで、対外的な独立と国内の統合を果たさなければならず、その意味での過去との宥和と利用が課題となる。

このテーマをマーク・ラヴィナ（第一〇章）は、紙幣のデザイ

ンを題材に追究する。日本は明治維新、米国は南北戦争を経て、はじめて国内の紙幣の統一を実現する。その時の日米いずれの紙幣も、自国の栄光の歴史を取り上げる点で驚くほど似ていた。そもそも日本の紙幣は米国 (Continental Bank Note Company) に発注して作られた。日米それぞれが独自性を追求していたこと、ただし独自性を追及するという営み自体はありふれていたこと、が示唆されている。

ジョン・ブリン (第一章) は明治の勲章を通じた外交を取り上げる。勲章の図象は、その国の伝統や歴史を象徴したものである。これを、明治天皇と西洋諸国の君主・王族が交換した。ただし英国からは拒絶され続け、二〇世紀初頭に実現したのは画期であった。また、日本は清韓とは同様の関係を築こうとはしなかった。このように勲章は、近代日本の外交的軌跡をも象徴しているのだ。

王政復古の舞台でありながら首都の地位を東京に奪われた京都や、それ以上に顧みられなかった奈良も、取り込むべき過去であった。高木博志 (第一二章) によれば、ヨーロッパ諸国がギリシア・ローマを自らの起源とするように、明治日本は奈良・京都を「古都」と位置付け、礼拝や観光の場として開発した。平城京 (奈良)・平安京 (京都) の時代の美術に岡倉天心が施した時期区分は、国風文化の登場という歴史理解を基礎づけ、美術史を超え

た日本の自己認識を規定した。朝鮮統治においても、慶州を古都とした時代区分を関野貞が試みた。それは帝国日本が、中国の文化的影響から自立した前史を持つていたという主張でもあった。

本書は、各章が実質的な参照や言及を加え合っており、求心力のある共同研究になっている。編者にリーダーシップがあり、各執筆者がそれに協力したと推定してよからう。

同時に、以上の紹介で明らかのように意欲的な論文が続き、いわば粒ぞろいの論文集になっている。編者の執筆章は事実を淡々と述べるスタイルをとっており、恐らく自らの意図や仮説を押し付けるよりも、他の著者に自由に論じさせたようにみえる。これも良いことだと思う。